

国際啄木学会インド大会報告

飯村 裕樹

小論は、本来であれば研究内容のみを掲載するところであるが、今回は筆者が参加した国際啄木学会インド大会（二〇〇八年十一月二十八日、二十九日）における感想を交えたものとした。

一、驚きのクニ、インド

インドにおりたつたあの日の印象は今でも鮮明に脳裏に焼きついている。まず衝撃的だったのは、空港で出迎えた厳つい銃をもった軍人の姿である。私がインドに入国したのは、二〇〇八年十一月二十八日である。あのムンバイでのテロの直後だ。私は、そのニュースを前泊した成田空港のホテルで知ることとなった。幸いにも首都ニューデリーから離れていたということもあり、無事に飛行機は飛び入国することが出来たのだが、そのような事情から空港での警備の状態はやや緊張したものとなっていた。その出迎への軍人の姿というのは、私がこれからそのような「平和なクニ」日本からはとても創造もできないような所に舞い降りてしまったという思いを強くさせたのである。

空港に到着したのは夜であった。空港からその日泊まるホテルまでは、チャーターしたバスでの移動となった。車窓から見るインドは日本とは似ても似つかないような光景であった。私は以前

ヨーロッパに行った経験があるのだが、ヨーロッパはまだまだ刺激は弱いほうなのだと思った。日本に住む私にとってヨーロッパはまだ想像できる範囲内のような気がする。漠然とした一体何がなんだかさっぱりわからない不安は少ないのではないのか。しかし、インドは違う。何がなんだかわからない。妙な不気味さでもって、砂埃の空気を染めるオレンジの街灯。片側何車線なのか、片側を何台の車が並んで走っているのかわからないような道路。無理矢理割り込む荒い運転の車だらけ。それに注意を促すなりやまないクラクション。反対車線に見える、バスに乗り込む無数の人だかり。バスを待つのか、そこで一体何をしているのか想像することさえできない人の群れ。派手で立派だが、どのような目的のためにあるのかわからない建物。目に映るすべてのものが新鮮とはまさにこのことで、私は片時も窓の外から目を反らさなかった。

そのようにして私ははじめてのインドを体験したわけであるが、想像できない様々なことを目にし、経験できたことに今では深く感謝している。まるで水浴びのようにバケツに水をため体を洗ったことも、硬くて寝心地の悪いベッドも、三食のカレーも日本では味わえない極上のスパイスであった。そして、本題の国際啄木学会インド大会の内容についても、非常に刺激の強いスパイスと

なつて、その味わいが記憶されている。

二、インドのシャヤーイラ (Mushaira)

国際啄木学会インド大会は、国際交流基金ニューデリー日本文化センター・タゴールホールにおいて、十一月二十八日、二十九日に行われた。大会の詳しい内容については、望月善次先生の「ガーンジス川に啄木歌は流れる 国際啄木学会インド大会報告①②③」〔盛岡タイムス〕二〇〇八年十二月十九日～二十一日、あるいは池田功先生の「国際啄木学会インド大会に参加して」〔赤旗〕二〇〇八年十二月十八日、国際啄木学会ホームページをご覧頂ければと思う。ここでは私の印象を中心に筆を進めたい。特に紹介したいのは、二日目のプログラムの最後に行われたウルドゥー詩の朗読会である。日本とインドから朗読者が詩を朗読するという内容であるが、私たち日本人が想像する朗読会とはまるで異なる。若林敦氏「ムシャーラ (Mushaira) —ウルドゥー詩の朗読会—」〔国際啄木学会 新潟支部報〕二〇〇九年) が、

会場は「詩の朗読会」という言葉で私たちがイメージするもの—例えば、詩人が自作の詩を読み聴衆が黙って耳を傾けている—とは異質な空間となっていた。(P. 10)

とその雰囲気の説明なさっているように、インドの詩人が自作等の詩を日本でいえば詩吟のようなイメージであるのか、調子をつけて読むたびに、(これは地元の学生に訳してもらったのであるが)「いいぞ、いいぞ、もつとやれ。」などという野次が会場全体から飛び交い、異常な熱気に包まれるのである。そこで朗読されていた一つの詩を紹介したい。

そのとき朝が来るだろう ノーマーン・シヤタウ

我々は開催するであろう

展覧会を

そこでは絵を描くだろう、子供たちよ

海軍の船や

タンクの絵を

鎧で覆われた自動車を

トイレにして用を足すであろう

かかしのように畑に立ち尽くすだろう

銃やライフルたちは

そしてそれらを鳩やからすがつつくだろう

そのとき我々は

世界が住むに値すると感じるだろう

そのときスホーイやF-16に

野良犬がおしっこを引っかけられるだろう!

この詩は一読しただけでとても好きになった。この詩の作者について、現地の学生に尋ねてみると「インドでも人気のある詩人だ」と教えてくれた。そして、彼も「これは良い詩だ」と言っていた。その人気の理由がなんとなくわかる気がする。同時に、もちろん言葉という隔たりはあるものの詩として言葉なり、具体化されたある感情に国境を超えて魅かれあうという悦びを体感した。これは、「啄木」を通して、お互いを交流した二日間から得た思いでもあった。とりわけ、やはり同年代のインドの学生の発表

に強く興味をそそられ、なんとか慣れないながら英語を聞き取ろうと耳を澄まして、それらの発表を聞いていたことは得がたい経験である。そこには、比較文学的な方法をとったり、あるいは翻訳という方法をとったりしながら「啄木」を理解し、魅かれていくインドの学生の姿があった。二日目の講評の中で、国際啄木学会太田登会長が「会場にポエジーが満ちています」という内容のコメントをなさしたが、日本にいただけではなかなか経験することができないポエジーに浸れた二日間は、今でも心に強く残っている。

三、発表概要

以下、発表概要については当日の発表レジユメの内容を引用したい。なお、今回の執筆にあたり一部修正した。

『あこがれ』における *From the Eastern Sea* の影響について
『五月姫』と *The Valley of Peace* を具体的作品としてあげながら

- 一、研究の動機
- 二、啄木の日記・書簡・評論からみるヨネ・ノグチへの関心
- 三、『あこがれ』における *From the Eastern Sea* の影響について
- 四、『五月姫』と *The Valley of Peace* を具体的検討作品として
- 五、小結

本発表は『あこがれ』研究会の人々から多くの示唆とご指導を受けた。とりわけ国際啄木学会前会長近藤典彦氏からは、本発表の発想段階から細部まで多くのご教示をいただいた。ここに記して感謝したい。

一、研究の契機

『あこがれ』は啄木研究の基盤・根幹として必ず研究されねばならないと考える。
先行研究において、多く『あこがれ』におけるヨネ・ノグチの *From the Eastern Sea* の影響については語られていない(そもそも『あこがれ』の作品個々について詳細に論じたものは少ない)。今回の発表では、上記の具体的作品における影響を考察することにより、その影響関係についての更なる可能性を示し、『あこがれ』研究の魅力の一端を探求していきたい。

『あこがれ』における具体的なヨネ・ノグチ *From the Eastern Sea* の影響はあるか。

二、啄木の日記・書簡・評論からみるヨネ・ノグチへの関心→別紙資料編

・とりわけ一九〇四(明治三七年)に集中。
・ヨネ・ノグチに大きな関心を示している。
・評論「詩談一則(『東海より』を讀みて)」「(『岩手日報』(一九〇四・一・一))では高い鑑賞力と優れた日本語訳をもって *From*

the Eastern sea を論じてゐる。

三 『あこがれ』における *From the Eastern Sea* の影響について
→ 「五月姫」を具体的検討作品として

・啄木はとりわけ「富士山に靈に捧ぐ」の歌 (Dedication to the Spirits of Fuji Mountain) 「平和の谷」(The Valley of Peace) の影 (Apparition) 月夜 (Under the Moon) 花びら (O Hana San) 鏡中の顔 (The Face in the Mirror) 寂寥の海 (The Seas of Loneliness) などについて「詩壇一則」で論じてゐる。

四、小結

日記、書簡、評論などから見てもヨネ・ノグチが啄木へと影響を与えたことは間違いないだろう。

とりわけ、「五月姫」における詩想の根本は「The Valley of Peace」にあり、これを考へられる。

二作品を読み比べてみると以下のようないくつかが考えられる。

① ロマン派詩人ヨネ・ノグチと啄木の共鳴から啄木は *From the Eastern Sea* へと惹かれていった。そして、その影響は詩作の詩想の部分に影響してゐる。

Mr. Noguchi's Japanese idylls are not more so to say locally Japanese than such poets as Alfred de Musset or Gautier might have written and his love-poems speak with the voice of lovers all over the world.

Mr. BLIS CARMAN in the "READER", New York

Evidently the Japanese poet is an impressionist
THE DAILY NEWS's first notice

今回は「五月姫」の *The Valley of Peace* を取り上げたが、その

詩の世界観 (近藤典彦は「詩壇一則」(『東海より』より読み) から引いて「五月姫」全体がヨネ・ノグチの「印象派的傾向」(イマプレシヨニスム) 「卓越せる想像の豊麗なる色彩」表現の応用にとめてゐること) と指摘している。) は非常に共通のものがある。

その具体的表現として表れた例が前掲の表の表現における指摘部分である。

② 「谷」と valley

「谷」のイメージ及び役割は *The Valley of Peace* のそれと非常に似ている。ヨネ・ノグチの描き出した「谷 (valley)」は姫、あるいは女神の存在する場所であり、現実と幻想 (夢) との狭間にある空間なのである。また非常に「豊麗な色彩」、幻想的な雰囲気でも描かれる対象でもある。「五月姫」における、そのような「谷」のイメージはヨネ・ノグチから引きつけられたところが大きいであろう。

③ 両作品の性的な表現

暗にセクシャルな「五月姫」(「雅歌」からの引用を背景とする) と直接的な表現によりセクシャルな *The Valley of Peace*。

作品全体に恋愛の官能的性質まで表現しようとしている点は共通であるが、その表現方法については差異が見られる。

しかしながら、両作品には以下のような相違も見られる。

・詩の構造については、啄木流のアレンジを加えてゐる。「五月姫」は小猿を待つ、そして夢の中に「ちめつちめゆる」。「平和の谷」では男女は出会い、恋は発展していくそして夢のなかを歩かす。

また、詩の構造について「五月姫」における話者は一人称視点であるが、*The Valley of Peace* は三人称視点により描かれてゐる。これは決定的な差であり、『あこがれ』の性質を表してゐる。

今回は一作品のみ取り上げての発表になってしまったが、『あこがれ』と From the Eastern Sea の全般にわたり論を展開することが今後の課題である。

今回の岩大語文の掲載にあたっては、指導教官である小浦啓子先生ならびに国語科の先生方に多くのご配慮を頂いた、最後に深く感謝を記したい。